

「百歳の胃」余話

松谷 隆

胃の四分の一、噴門の切除を受けて一年が過ぎ、五月二十七日の主治医との面談は「血液検査の結果も心配なし。次回十二月二日に造影剤使用のCT、八日に内視鏡による胃の検査」と短時間で終了した。

その直前に管理栄養士による胃手術後の障害分析アンケートを受け、その結果は消化器症状、生活不満足、噴門切除障害いずれも問題なく、体重も同じ患者の平均十・九%減に比し、五・二%増で回復の早さを示していると喜んでもらえた。

『悠遊二十八号』掲載の『百歳の胃』に書きそびれた事は、退院後の第一回面談で、主治医から「切除部の病理検査の結果、ガン細胞はビビたるもの」と首をかしげる様子で報告されたとき思い浮かんだことだ。それは手術前の半年間、世話になった内視鏡センター長の治療に対する熱意である。

一昨年十一月と二ヶ月後の二回の内視鏡検査で、病理サンプルを計二十カ所採取されたことをかかりつけ医に報告したら、「(胃ガンを)相当疑われているよ、覚悟しておいた方がいいかも」との反応があった。そして腫瘍摘出部からガン細胞が検出された後、摘出部の経過確認時に取った病理サンプルからも見つかっている。今では、これでガン細胞のほとんどを摘出してもらえたと信じている。

センター長は、何としても自分の手で完治させようと、噴門狭窄の発生後、五回も風船挿入の拡張手術をおこない、最後には上半身をヨード注入CTでチェックし、ガンの転移がないことまで確認していた。しかし、「拡張手術の効果がでないため、相当悩んだ末に外科手術を勧めたわけ」と、妻は主治医から聞かされていた。

噴門切除についての主治医との最初の面談後、偶然センター長と出会った。面談結果を聞かれ、「外科に決めました」と答えたとき、センター長はそれまでのしかめ面から破顔一笑で「そうか、よかった！よかった！」と飛び上がらんばかり。思わず、妻と顔を見合わせた。(それだけ気にしてくれていたのか)と非常にうれしくなった。

(令和三年六月十日記)